第 299 号

館長だより

山形県産業科学館

令和７年９月２１日(日)

発行 館長　加 藤 智 一

山形鋳物

山形県産業科学館には、山形鋳物を紹介するコーナーがあります。今回は、山形鋳物の歴史を簡単にまとめてみましたのでご紹介したいと思います。

山形鋳物の歴史は、戦国時代以降、地域の政治・宗教・産業の発展と密接に結びついて発展してきました。

(1) 戦国期の山形鋳物　最上義光と城下町の形成

16 世紀後半、山形城主・最上義光が城下町の整備を進める中で、鋳物師たちが山形に集められました。馬見ヶ崎川の北側には「鍛冶町」「銅町」など、火を扱う職人の町を設け、鋳物産業の基盤を築いたとされています。この町づくりは、日本における初期の工業団地形成とも言われており、仏具や日用品に加え、武具や鍋など実用性の高い製品を生産していました。特に戦乱の時代には、武具や兵器の部品としての鋳物需要が高まり、技術の発展が促されたと考えられます。また、山形は禅宗や浄土宗の寺院が多く、仏教文化の拠点でもありました。そこで、鋳物師たちは釣鐘や香炉などの仏具を製作し、宗教的需要に応えることで技術を磨いていきました。

山形鋳物は、戦国期において「武と祈り」の両面を支える工芸として発展しました。最上義光の産業振興政策と、地理的・地質的な条件（良質な鋳物砂や粘土、冷涼な気候）が重なり、鋳物文化が根付いた言ってよいでしょう。この時代の鋳物づくりは、単なる技術ではなく、地域の信仰・防衛・生活を支える「総合的な文化装置」だったとも言えます。

(2) 江戸時代　信仰と暮らしを支える鋳物文化

最上義光による城下町整備の流れを受け、江戸初期には「銅町」「鍛冶町」など火を扱う職人町では、鋳物師が人足役を免除されるなど優遇され、産地としての基盤が強化されました。梵鐘・燈籠・香炉などの仏具に加え、元禄期以降は茶道文化の広がりに伴い、精緻な茶釜や鉄瓶が登場。美術鋳物の萌芽が見られ、芸術性が高まっていきます。

(3) 明治～昭和～平成　美術工芸と機械鋳造の二極化

明治 20 年代には「山形の鉄瓶」が全国に流通し、茶人や趣味人の間で高い評価を獲得。鉄瓶は山形鋳物の代名詞となりました。また、昭和 40 年代には機械鋳造の需要が高まり、銅町から西部工業団地へと生産拠点が分化。工芸品と機械部品の両方を生産する「二極型産地」が形成されました。

工芸品の分野では、多くの名工が登場します。梵鐘の庄司清吉、灯籠の小野田才助、茶釜の高橋敬典（人間国宝）などは有名ですが、各時代ごとに名工が登場し、技術と美意識の継承が進みました。

また、昭和 52 年には山形市霞城公園内に、像の重量３トン、台座２トンにもなる最上義光騎馬像が、㈱西村工場により立てられました。当時、世界に例を見ない、2 本足の騎馬像として話題になっています。さらに平成 24 年に完成した東京スカイツリーには、㈲渡辺鋳造所によるエレベーターの滑車（直径 150cm 重さ 1,500kg）が採用されている他、自動車部品や各種機械部品の一部として、多くの鋳造製品が、生産されています。

(4) 現代　伝統とデザインの融合

山形鋳物は昭和 50 年に経済産業大臣より「伝統的工芸品」に指定され、全国的な認知を得ました。そして現在、鉄瓶・茶釜に加え、風鈴・花器・インテリア雑貨・アクセサリーなど、現代のライフスタイルに合わせた製品が続々登場し、海外展示会やデザイナーとのコラボも進行中ですが、「型挽き」「紋様押し」「肌打ち」などの伝統技法は、若手職人によって継承されつつある一方で、後継者不足や原材料の確保などの課題も抱えています。

山形鋳物は、地域の自然資源（鋳物砂・粘土）、気候（乾燥と寒冷）、文化（茶道・仏教）、そして職人の技術が融合した「用の美」の象徴です。現代では、伝統を守りながらも新しい表現を模索する動きが活発で、山形のアイデンティティを体現する工芸として、国内外で注目を集めています。